生活保護改悪2法案採決強行

"一生を左右するのに"

参院厚労委

生活に困窮した人たちを最後の「安全網」から締め出す生活保護改悪2法案。参院厚生労働委員会でわずか2日間、8時間半の審議で自民、民主、公明、みんな、維新によって採決が強行されたことに傍聴席を埋めた人々から怒りの声が噴出しました。

「ひどい改悪で、人の一生を左右する重要な法案なのに、わずかな時間でチャンチャンと通す。すごく憤りを感じた」。こう語るのは大阪府の生活と健康を守る会の仲間と傍聴に駆けつけた摂津市の吉川洋子さん(60)。頸椎(けいつい)損傷で、昨年1月から生活保護を利用。国会も傍聴も初めてです。申請時に、両親の離婚で幼少時に別れた妹や、再婚した実母のところまで扶養照会がいきました。

「肩身が狭かった。これから受ける人はもっと厳しい親族への扶養義務強化や調査がされる。これからも反対の運動を広げていく」と力を込めました。

同行の女性(81)も傍聴は初めて。「居眠りしていた連中が最後にシャンシャンと。きれいごとであきれた」と憤慨します。「共産党の辰巳孝太郎議員の質問は生活保護の現場にいたので真実味があり、よく納得できた。がんばって大阪からきたかいがあった。小さい力ですが、がんばる」と話します。

採決後、参院議員面会所で、辰巳議員のほか、小池晃、紙智子の両参院議員があいさつ。小池議員は「衆院での審議で実態をつきつけ、問題点をさらに深めて廃案へたたかっていく」と決意表明。

全国生活と健康を守る会連合会の安形義弘会長は「賛成した議員たちが付帯決議で多くの要望項目を並べるまで運動で追いつめた。ここに確信をもち、現場の事実をもってさらに反対の世論を広げよう」と呼びかけました。